

## 新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

### 不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

#### 【取組1】(A中学校)

単元計画に、生徒が自ら課題を設定し、課題解決に向けて自己選択できる学習活動を位置付けた。教師は、生徒が主体的に取り組めるように一人一人を丁寧に支援し、評価できるようにした。

また、6、7、9、11月に、生徒と学級担任が対話する時間を確保し、生徒が「自分は大切にされている」という自己存在感や有用感をもてるようにした。



#### 【取組2】(A中学校)

学年代表が中心となって、学年全員が楽しめる企画(つなひき・鬼ごっこなど)を計画・運営しました。互いの関係を深め、学校への帰属意識が高まった。

生徒会が、よりよい学校を目指して意見を伝えるアンケートフォームを常時開設し、先生方と協働しながら解決策を検討できる仕組みをつくった。一人一人を大切にする学校風土の醸成につながった。



#### 【取組3】(B中学校)

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、生徒が学びやすくなるよう、各教科、毎時間の授業の中でファシリテーションを取り入れた。

「どうすれば生徒が考えやすくなるか」、「生徒の思考が深まるか」という点に着目し、自己決定力の場の提供に力を入れた。問いのデザインや場の設定等を工夫することで、生徒が自ら考え、目標を設定したり、活動を選択したりする力が高まった。



#### 【取組4】(B中学校)

年間を通して、全学年の生徒を対象にSCによる授業を行っている。1学期は「SOSの出し方」をテーマに、自己の心の変化に気付くことや、SOSへの対処方法について考え、安心して夏休みを過ごせるようにした。2学期は「協力」をテーマにワークショップを行い、目標達成のために協働することの大切さを、楽しみながら実感させることができた。教員も一緒に参加することで、生徒の心の変化に早く気付き、声の掛け方を工夫することについて学ぶことができた。

## 多様な学びの場を確保する取組

### 〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

#### 支援会議（C中学校）

毎週水曜日に支援会議を実施した。管理職、教育支援コーディネーター、SC、専門員などで支援シートを基に話し合いを進めた。不登校生徒の対応を始め、サポート教室やスキップ、校内別室に通室している生徒などの情報交換を行い、SCなどから助言を受け具体的な対応策を考え、各学年に共有した。

#### アウトリーチによる支援（D中学校）

生活指導部会・特別支援委員会の日程を不登校巡回教員とSSWも参加できるように調整した。特定の教員と情報交換するのではなく、様々な教員がいる校内会議に参加することで、正確な生徒情報を共有した。また、該当生徒の授業観察や、家庭訪問の検討も行った。

#### 校内別室における支援（E中学校）

不登校生徒が安心して過ごせる場所（校内別室）を週5日開室している。不登校対応巡回教員が中心となり、学年教員、学校生活指導員と連携しながら、校内別室指導の運営を行い、生徒の実態に合わせて登校時間や支援内容の工夫を行った。

不登校生徒の該当クラスの授業をオンライン配信したり、校内別室で担任または学年の教員と給食を食べることができるようしたり、他の生徒と交流できるような交流スペースを設置したりと安心して教室に戻れるような支援や登校したくなる雰囲気づくり、環境整備にも努めた。



#### デジタル機器を活用した支援（E中学校）

長期休業明けの全校面談と併せて夏季休業最終日にオンライン学活を実施し生徒の様子を確認している。

各教科の資料や連絡黒板の写真を授業支援ツールに載せ、欠席者にも時間割や課題を共有した。不登校生徒や保護者、また連絡が繋がりにくい家庭にも学校の情報を伝える手段として活用した。

#### 関係機関との連携（C中学校）

地区の教育支援センターに通う生徒に関して、職員との連携を密にした。互いの教職員が訪問し合い、顔を合わせての情報共有を大切にした。またSSWを活用し、対象生徒の家庭訪問を継続して実施した。学習支援や折り紙などの活動を通し、継続した支援を行った。

## 成 果

校内別室の設置により、学校に行ってみようと思うきっかけになり登校する生徒がでた。不登校生徒に加え、欠席した生徒や不安感が強い生徒への支援として継続的に実施することができ、未然防止にもつながった。

## 課 題

校内別室で支援する職員の配置が週に3日しかないため、毎日の通室に対応することが難しい。